

# かぞく百景 I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp



721号となる「教育と医学」7月号を手に、活動の歩みを振り返る「教育と医学の会」の望田研吉会長

## 教育と医学、複眼の視点

### いじめや障害…重み増す活動

#### 学術月刊誌 創刊60年

スタートは九大研究者の呼びかけ

教育と医学の複眼の視点から、子どもたちの育ちと学びをどう支えるか。戦後間もなく九州大学の教育、医学両学部の研究者有志が呼びかけ、発行を始めた学術月刊誌「教育と医学」が創刊60周年を迎えた。721号となる7月号には「これからの学校とは」などをテーマに、多分野からのレポートが掲載されている。いじめや不登校、発達障害などの問題がクロスアップされる中、その活動の歩みは重みを増す。

(佐藤伸之)



「よい子を育てるをスロウガン」発行された創刊号

雑誌を発行しているのは「の心理」(強い子弱い子)「教育と医学の会」。19「学級編成の問題」などの50年、開設間もない教育 タイトルが並ぶ。学部(49年開設)と、医学 昭和28年、戦後の混乱期部の小児科、精神科の研究とあって、主テーマは「健康者たちが集まって結成された『康教育』。巻頭言では、会だ。53年7月に発行されたの発起人を代表して当時の創刊号の目次には「小学生 平塚益徳・教育学部教授が

「真の健康人(人格体)を 成瀬さんは「今でいう不登校を、当時は『学校恐怖症』と呼んでいた。子離れできない親子関係などが背景にあるように思われた。カウンセリングの理論や実践を紹介したら、教員や実践の対応に悩む関係者から反響があった」と話している。

60年代の特集テーマで目立つのが「カウンセリン グ」。子どもの心の問題に 対応する専門家「スクールカウンセラー」が今では、各学校に配置されているが、当時はまだ聞き慣れない言葉だった。

このテーマで当時、リポ ート執筆に当たった二人は、編集委員15人が毎月会 が、九大教育学部の成瀬悟 策さん(89)と九大名誉教 授。成瀬さんは、脳性まひ の子どもたちの動作改善 の子と私たちの動作改善 法(動作法)を考案し、実 践を続けたことで知られ ている。

「よい子を育てるをスロウガン」

教育をめぐる動きを振り 返ると、70年代は家庭内暴 力、校内暴力。80年代にな ると、いじめや不登校が深 刻化し、「学級崩壊」とい う言葉も生まれる。90年代 になると、子どもたちの発 達障害についての研究も深 まり、学習障害(LD)、 注意欠陥多動性障害(AD HD)などの言葉も広まっ ていく。

取り上げられたテーマを 振り返ると、時代をやや先 取りし、教育現場の世相を 映し出している。とりわけ、 治療、訓練、指導が求めら れる心身の障害児教育への 考察、提言は息長い。

2000年代に入ると、 学校現場ではゆとり教育が 完全実施される一方、学力 低下論争が巻き起こり、脱 ゆとりの新学習指導要領導 入(11年)に向けた動き も加速する。特集テーマに も、学校や教員、制度のあ り方を問い直すリポートが 目立っている。

最近では、東日本大震災 を受けた「子どもにとって 必要な災害時・災害後のケ ア」(11年11月)。今年5 月には「読み書きが苦手な 子の理解と支援」をテーマ に「ディスレクシア」とい

子どもたちの心が見えな い時代といわれるだけに、 心身両面からの研究、実践 がより求められている。望 田さんは「これからも時代 のテーマを見定め、研究者 はかりでなく、教師や保護 者たちの指導や暮らしにも 役立つよう、より広く、分 かりやすく伝えていきたく」と話している。

